

大けやき

〈登場人物〉

権三

村人一

見物客一

村人二

見物客二

村人三

見物客三

村人四

見物客四

村人五

見物客五

木挽き一

旅人

木挽き二

鬼火一

お杉婆

鬼火二

子供一

鬼火三

子供二

鬼火四

子供三

キイチ

子供四

里長

子供五

月影の里人たち

子供六

大蛇

若者

鳥の女一

村娘

鳥の女たち

旅の僧

仏師（旅人と二役）

第一場 権三の家の庭

舞台薄暗く、靄がかかっている。

仏師（客席に向かい） 仏を造るのに用いる

木を御衣木（みそぎ）と申します。ただの

木ではございません。霊木、霊験あらたか

な木。木に霊力がありますと、仏にも力が

宿るということでございます。その昔、帝

が巨樹を伐り倒して、三つに分けて湖に流

しましたところ、その三切れが行く先々で疫病を流行らせました。そこで帝はその三つの木切れを仏にせよと命じたそうでございます。その一つが、近江国志賀寺聖観音、二つ目が長谷寺十一面観音、三つ目が当寺本仏千手観音なんだそうです。

仏師 ほお……こりや、まあ……（再び客席に向かい）御衣木には寄木と申しまして、川の上流から下ったり、海に出たものが浜に寄り付いてきたり、あるいは異国から潮に乗ってくるものもございます。ほかには雷に撃たれた木も、これは神が依り付いたとされまして御衣木に選ばれました。木の中にこもった霊というか、神様と申しますか、それらを形ある仏にしてこの世に迎えると、そういうわけでございますな。

仏師 ああ、それから立ったままの生木も。
 はい、そうです。立木です。生きているや
 つに彫るんです。立木観音といひまして。
 いえ、私は彫ったことはありません。だい
 たい彫りにくい。なにしろ生きているん
 すからね。やわらかいし……それに（小
 声になつて）息をしてるんですから。息をす
 るんですよ、木は。それにドクンドクンと
 流れてる。幹の中を流れてるんです。何
 がつて？ そりや、水でしょう。水が流
 るんですよ。そんなものに鑿を突き立て
 なんて、私にはどうも……：：：氣味が悪いじや
 ございませんか。

読経が聞こえる。『観音経』

仏師 それに、もし彫ったとしても、それは生きている木なんですから、生きている木は毎年、成長しております。丈も伸び、太くなる。すると、どうなるんでしょうね。その観音様は……どうなる……（急にふりかえる。つぶやく）誰か、そこにいたような……まさか。

読経の声、段々大きくなる。
突然止む。暗くなる。

舞台再び明るくなると、仏師はいない。
舞台中央に樗の巨木。差しわたしは一間二尺、高さはおよびもつかない。下手に権三のあばら家。
村人と見物客の合唱『何と立派な大樗』。

何と立派な大樗

見惚れてしまうその姿

雲にも届くその高さ

梢で休む風の神

空を覆いし大屋根で

雨粒一つ漏らさない

何と立派な大樗

心動かすその姿

世に名利は数あれど

三百年の齢が築く

天を支える青き伽藍

住まう仏は数百羽

見物客一 まあ、この幹の太いことといったら。どれくらいあるのかね。

村人一 差しわたし、一間二尺とか三尺とかいわれとる。

見物客二 ほお、それじゃあ、大人五人でも

手が回るかわからんな。

村人二　ものは試し、やってみなされ。

見物客五人、手を伸ばして櫓を囲んでみるが届かない。

見物客三　なんとか……はあ、無理か。

見物客四　それにしても大きい。それで、丈はどのくらいあるんだい。

村人三　十五丈とか二十丈とかいわれているが、本当のところはわからん。測るに測れんであ。

見物客二　そりやそうだ。

村人一　こいつに上ると、ずいぶんと遠くまで見渡せる。西山村や河野村も一望だ。

見物客一　河野村といったら、ここから二十里も向こうだぞ。

村人二　餓鬼の時分誰が一番上まで上れるか競ったもの。どうだ、あんたらも話の種に。

見物客三　いやいや、止めておこう。足を滑らせでもしたらたいへんだ。

見物客五　天を衝くとは、まさにこのこと。

村人四　首折り櫓ともいわれとる。

見物客五　首折り？

村人四　ほら、こうして見ていると……どうしても首が。

見物客三　本当に折れたのか？

村人一　折れるものか、筋を違えただけさ。

何と立派な大櫓

声も失うその姿

一度見たなら忘れぬ

一度見なけりや　すまされぬ

朝日村にはすぎたる名所

かくも尊き大社

見物客三　これだけの木に滅多にお目にかか

れるものでない。ありがたい、ありがたい。

村人三 この村には、他によその人に見せるものもないで。

見物客二 いやいや、たいしたものを見せてもらった。

見物客四 こんなに立派なのだから、村で本社でも建てたらどうだ。

村人二 そうはいかねえ。

村人三 この大樺は権三さのものでな。

見物客三 誰かの持ち物なのか？

村人一 ああ、ほれ、その。

見物客四 へーえ。

村人たち見物客、退場。

権三 が出てくる。

権三 ああ、うるせえ、うるせえ。毎日毎日かなわねえな……へっ、何がお社だ。ああ、お社でも建ててもらいたいものだ。お社ならば賽銭箱を置ける。それならいくらかの足しになるうというものさ。

権三が歌う。『いまいまいだけ』

いまいまいだけ それだけだ

腹立たしいだけ それだけさ

立派な木だと？ 知るものか

見事な木だと？ くそくらえ

栗やら柿なら実が獲れる

ところがこいつはなしの木だ

なんにも無しのなしの木だ

俺の家には日陰になるし

枯葉で屋根がつぶされる

いまいまいだけ それだけだ

腹立たしいだけ それだけさ

立派な木だと？ 知るものか

見事な木だと？　くそくらえ
勝手に住みつく鳥（やつ）らめは

店賃払わぬ居候

居直り居座る居候

俺の頭に糞たらし

干した大根もつつかれる

権三　たいしたものだ、立派なものだと誉められても何のご利益もない……こいつは、ただただ、でかいだけの役立たずだ。

いまいましいだけ　それだけだ

腹立たしいだけ　それだけさ

立派な木だと？　知るものか

見事な木だと？　くそくらえ

そんなにたいしたものならば

木戸銭、賽銭置いていけ

ほめるだけなら只ですむ

俺には屁すらひっかけぬ

櫓の家来と見下して

権三（子供たちに）何だ、おまえら。

子供一　こんにちわ。

権三　用があるのか。

子供二　権三さに用はない。

権三　ならば、向こうへ行け。

子供三　おらたちは、ここにいたいのだ。

権三　目障りだ。

子供四　おらたちには権三さが目障りだ。

権三　何だと！

子供一　おらたちはそこで遊びてえだけだ。

権三　遊ぶのはここでなくてもよからう。よ

そへ行け、よそへ。

子供五　ここが、いい。ここがいいんだ。

権三　うるせえ、うるせえ！　そうか、そんなにここがいいか。ならば、おまえらみんなこの木に縛りつけてやる！

権三、子供らを追い回す。

権三 もう来るなよ。わかったか！

子供ら、権三に向かって唄う。

櫓の根元に茸がござる

ちっちゃなちっちゃな茸でござる

かさは虫食い 雨漏れまする

風が吹いたら 柄が折れまする

ゴンゾダケと申します

煮ても焼いても食べませぬ

権三 この、この餓鬼めら。人を馬鹿にしや
がつて！ 待て、こら、畜生！

子供ら逃げる。入れ替わりに旅人。

旅人 あの。

権三 何だい。

旅人（権三の家を指し）おまえさん、あそこ
にお住まいか？

権三 ああ、そうだ。

旅人 では、おまえさんが、ここの番人か。

権三 ば、番人だと！

旅人 そこは大櫓の番小屋なんだろう。

権三 ほお、それで俺が櫓の番人なら、どう
だというんだ。

旅人 いや、この評判の大櫓を眺めながら弁
当でも食おうと思つてな。ついては、湯を
わけてもらえないかと。

権三 湯をか？

旅人 ああ、頼めるかね。

権三 いいとも、お安いご用だ。湯ならさつ
き沸かしたばかり。すぐ持つてくるから、
そこで待つておれ。

権三、家へ戻ると桶に湯を入れてくる。
弁当を開いている旅人に浴びせかける。

旅人 熱っ、熱。な、何をするっ！

権三 何をするだと。湯をかけろというから
かけてやったのだ。

旅人 耳が遠いのか。わしは湯をわけろと
いったのだ。かけろではない。

権三 耳が遠い？ 遠いものか！ おまえが
櫓の番人などとはざいたのもちゃんと聞こ
えたわ。やい、どこの世界に櫓の番人がい
るんだ！ 馬鹿にしゃがって……ぐずぐず
してると。

権三に追い回される旅人。二人は櫓の回
りで追いかっこ。それをいつのまにか
戻ってきた子供たちが見ている。

旅人、やつと振り切って下手へ。権三、
木の根に足をとられて激しく転倒。動か
ない。様子をうかがいにくる子供たち。

第二場 大櫓切腹

一場と同じく権三の家の庭。木挽きが二
人、大櫓を眺めている。

木挽き一 旦那、本当にこれを切ってしまう
のかい。

権三 ああ、バツサリとやってくれ。

木挽き二 わしら、仕事柄、立派な木を何本
も見てきたが、これほどの櫓にお目にかか
ったことはねえ。

権三 おまえたちが切れないというのなら、
他をあたる。木挽きはおまえたちだけでは

ないからな。

木挽き一 やらんとはいわん。(木挽き二に)じゃあ 仕度にかからせてもらおう。

木挽き一、二、退場。

入れ替わりに村人一、二がやってくる。

村人一 おい、権三さ。その……大櫓を切るという噂が流れているが。

権三 そうかい。

村人二 まさか本気ではなからうな。

権三 本気だ。

村人一 冗談だろ。

権三 冗談？ 冗談ではない。本気も本気、大本気だ。

村人二 だって、おまえ。

権三 だって糞もない。

村人一 なぜ切るのだ。こんな立派な木をもったいないではないか

権三 もったいないだ。もったいないものか。こいつは俺には何の役にも立たない代物だ。役に立たぬどころではない。ヤクはヤクでも、厄介の厄、厄払いの厄だ。

村人二 こいつはおまえの家に代々伝わってきたお宝ではないか。かれこれ三百年になると聞くぞ。

権三 確かに、俺の家の前にずっとあるのだから、代々伝わってきたのだろうよ。だがな、こいつはお宝じゃない。三百年か四百年か知らぬが、そんなに珍しいことでもない。鶴は千年、亀は万年というではないか。それに比べたらたいしたことはない。

お杉婆、村人三におぶさってくる。村人四、五も一緒に。

お杉婆 権三、権三、ならねえぞ。大櫓を

切っちゃならねえ。絶対にならねえぞ！

権三 婆さま。

お杉婆 大樫を切るなんて、とんでもねえことだ。これはこの朝日村の魔除けだぞ。

権三 そんな話、俺は聞いたことはない。

お杉婆 わしが子供の頃の話だ。ここを通りかかった旅のお坊さまが、大樫を見てこう言ったそうだ。これは天の魔を防ぎ、地の魔を寄せぬ村の守り神だと。

村人四 お杉婆、天の魔って、何だ？

お杉婆 天の魔とは、空からやってくる災厄だ。大嵐に日照り、雹や霰、霜、蝗……そして地の魔がやってくると山津波や大水。井戸や池が枯れ、水が腐る。作物や家畜は病気になる、人も無事ではおられぬ。

村人五 おそろしいことだ。

権三 知らぬ、知らぬ。そんなどこぞの乞食坊主の戯言など信じられぬわ。

村人三 だが、権三さ。

権三 お杉婆は今年八十歳だぞ。子供の頃といったら、いったい何年前の話だ。それに近頃じゃすつかり。

お杉婆 わしは、呆けてはおらん。

権三 木の名前の婆さまが、朋輩の樫をかばう気持ちもわからんではないがな。

お杉婆 頼む、権三。この年寄りのためなく、皆のために大樫を切らんでくれ。

村人、子供たちが歌う。『大切な木を』

村人が一番、子供が二番、三番は一緒に。

切らないでどうか

大切な木を

なくさないでほしい 憩いの場

夏の暑さも夕立も

かくしてくれる緑の笠で

つかれた体を包んでくれた

母さんみたいな やさしさで

切らないでどうか

大切な木を

なくさないでほしい 遊び場を

木登り ままごと かくれんぼ

すべって ころんで 泣いてても

太い腕でささえてくれた

父さんみたいな 頼もしさ

切らないでどうか

大切な木を

なくさないでほしい 思い出を

かなしいときや つらいときも

変わらぬ姿に励まされ

生きる勇気を与えてくれた

お日さまみたい な あたたかさ

切らないでどうか

大切な木を

なくさないでほしい いつまでも

子供一 櫓を切るな！

子供二 櫓を切るな！

子供三 櫓を切るな！

子供四 切るな！

子供五 切るな！

権三 ええい、うるさいっ！

村人一 権三さ、わけを聞かせてくれ。

権三 ふん、今までさんざん馬鹿にしやがっ

たくせに。俺の土地の俺の木を俺がどうし

ようと俺の勝手。わけなんてどうでもいい。

俺が切りたいから切る。それだけのことだ。

木挽き一、二が巨大な鋸を持って登場。

権三（子供らに）危ないから向こうへ行っ

おれ。ぺしやんこになっても知らんぞ。

子供一 たたりがあるぞ！

子供二 そうだ、たたりがあるぞ！

子供三 たたるぞ、知らねえぞ！

権三 たたりだ？ 面白い、たたってもらおう。

う。俺が怖がるとでも思ったらお生憎だ。

（木挽きに）さあ、早いとこ片付けてくれ。

木挽き一、二、鋸を引き出す。二重唱。

『木挽きの暮らし』。

木挽きの暮らしは山暮らし

女房残して相方と

峰を渡りの 啄木鳥さ

やーせい やーせい 声あわせ

やーせい やーせい 声あわせ

切って倒して 何千本

お侍なら今頃は 十万石のお大名

木挽きの暮らしは山暮らし

女房こいしや相方と

鋸（のこ）をはさんで抜き刺しさ

やーせい やーせい 声あげて

やーせい やーせい 声あげて

仕留めて刻んで 何千本

鯨刺しなら今頃は 浜一番のお大尽

村人二 まるで腹切りの途中を見せられてい
るようだ。

村人三 ああ、いやな気分だ。

村人四 ぎいぎいと、泣いてやがる。

村人五 ああ、泣いている。

木挽きの暮らしは山暮らし

女房忘れて相方と

飲んで唄うがなぐさめさ

やーせい やーせい 声枯れて

やーせい やーせい 声枯れて
見立てて選んだ 何千本
お女郎買いなら今頃は 廓で噂の色男

木挽き、鋸を抜く。斧を入れる。

木挽き一 おーい、倒れるぞ。

バサバサと鳥の飛び立つ音。ミシミシと
いう音とともに大樫が傾く。
倒れるのと同時に轟音、土煙。

第三場 鬼火の噂

巨大な樫の切株。人の背丈ほどもある
葉っぱの小山が七つ並んでいる。

村人一 はあ、さっぱりとしてしまったな。

村人二 見ろよ、この切株を。ここで相撲が
とれるぞ。

村人三 すごい木だったなあ。すべて刻んで
運びだすのに七日もかかるはずだ。

村人二 権三のやつは材木を売って、しこた
ま儲けたのだろう？

村人一 たいしたことはない。ただ、一番太
いところは太鼓にするとかで、わざわざ買
い手が受け取りにきたらしい。

村人三 へえ、太鼓か。それでどこの村のも
のだい？

村人一 それが、どこの者か。ここの人間
ではないそうだ。若い衆が二人、馬に引か
せた木櫃で運んでいったそうだが。

村人二 しかし、あんな太い幹でつくるんだ
から、おそろしくでかい太鼓だな。

村人が話しているところへ見物客。

見物客六 あのだ。

村人一 何だい。

見物客六 この辺りに有名な大櫓があると聞いてきたんですが。

村人二 残念だが、櫓はないよ。

見物客六 ここではないんですね。

村人一 いや、ついこの間までここにあったんだが。

見物客六 この間まで？

村人一 ほら、そこを見なされ。大櫓の切株だ。

村人二 名高き大ケヤキ殿はお隠れになったということさ。

村人三 そこに葉っぱの山があるだろ。

見物客六 これが全部！ ああ、見たかったなあ。さぞすばらしい木だったろうに。

見物客六、退場。

村人三 お隠れになったといえ、お杉婆だ。

村人二 ああ、急に逝っちまったな。大櫓が切られて三日後だ。まるで……。

村人一 大櫓のあとを追うように。

村人たちが退場。かわりに、子供たち。

ひそひそと話し始める。

権三登場。彼らに気づき、盗み聞き。

子供二 おらのおとうも見たというぞ。

子供三 ああ、うちのじいさまも見たと。

子供四 何だ、何を見た？

子供二 夜の夜中に、この大櫓の切株の傍にチラチラと火が見えたそうさ。

子供五 火？

子供四 何の火だ？

子供三 鬼火だ、鬼火。

子供四 そりや化物か？

子供二 知らねえ。それから話し声が聞こえたそう。

子供四 話し声？ 鬼火がしゃべるのか？

子供二 そうだ。

子供五 怖ええなあ。

子供三 ああ、怖ええぞ。

子供一 たたりだ。

子供三 やっぱりたたりか。

子供四 たたりだ、怖ええなあ。

子供一 逃げるぞ！

子供たち、「たたりだ、たたりだ」と喚きながら退場。子供五、遅れる。

子供五（半泣き）待ってよ、待って！

権三 けっ、何がたたりだ。鬼火だと。狐か狸か、さもなくば村の誰かのいたずらだろうが。どちらにしろけしからん話だ。俺がひつつかまえてとつちめてやる。

舞台、暗い。

権三、莫蔭をかぶって切株を見張っていたが、うつらうつらしてしまう。

鬼火が飛ぶ。ひそひそ声。

権三、目を覚ます。声が大きくなる。

鬼火一 これもみな、あの権三の大馬鹿殿のおかげ。

鬼火二 まったくまったく。あと三百年は寿命の残っていた大樫を始末してくれたのだから。

鬼火三 権三の親父も、爺さんも、その前も、代々間拔けなやつらばかりだったが、権三ほどではなかった。

鬼火一 どうしても樫を切ろうなどとは、ただ

の一度も考えなかった。

鬼火二　ところが権三は極めつけ。

鬼火三　大が三つも重なる大馬鹿野郎。

鬼火一　それにしても権三は櫓のことを本当に知らなかったのか。

鬼火二　知っていれば切りはすまい。あれがこの村の魔除けだと知っておれば。

鬼火三　そうよ、何しろあれは空一杯に広げた枝で天の魔を防ぎ、地中に張り巡らせた根で地の魔をしっかりと押さえつけていたのだからな

権三　婆様の言ったことは本当だったのか。

鬼火二　それがこうしてなくなった。根っこもやがて腐りだす。そうすれば三百年分の災厄がいつべんに吹き出すぞ。

鬼火一　そりやまた、豪気なことだ。

鬼火二　生地獄が見られるな。

鬼火三　楽しみなことだ。

鬼火一　地獄の一番乗りは権三かな。

鬼火二　もちろん、大手柄の主から先に地獄行きだろうよ。

鬼火たち笑い、歌う。『地獄の季節』

地獄の季節がやってくる

春夏秋冬（はるなつあきふゆ）人が死ぬ

空が晴れても人が死ぬ

風が吹いても人が死ぬ

焦熱地獄　阿鼻地獄

八大地獄が押し寄せる

逃げてても逃げててもつかまえる

ああ　絶景だ　絶景だ

鬼火四（お杉婆と同じ声）その恐ろしい災厄から逃れる手立てはないのか？

鬼火二　大櫓が切り倒されたとき、鳥の巣から卵が落ちて割れたな。

鬼火四 ああ、いくつも割れた。

鬼火二 あの卵を繕うことができたなら、逃れることもできよう。

鬼火四 無理を言うな。そんなことができるものか。

鬼火二 わっはっはっ。割れた卵が元に戻らぬように、一度切ってしまった木は決して元に戻らぬわい。

鬼火三 そりや道理だ。

鬼火二 ……だがな。

鬼火四 何か、あるのか？

鬼火二 あるにはあるが。

鬼火四 勿体つけずに聞かせろ。

鬼火二 実はな、あの大櫨の葉っぱの中に、命の葉というやつがある。

鬼火四 命の葉だと。

鬼火二 そうだ、櫨の最初の葉だ。こいつばかりは他の葉のように秋になっても枯れて落ちることはない。冬の間でさえ青いまま残っているという特別なやつだ。つまりかれこれ三百年も生きてきた櫨のお守りというわけだ。

鬼火三 その命の葉が、どうだというんだ。

鬼火二 その命の葉を見つけて、この切株にのせてやると。

鬼火一 のせてやると。

鬼火二 櫨は生き返るそうだ。

鬼火三 生き返るだと。切った櫨がか！

鬼火二 元の通りに。

鬼火一 そんなうまい手妻があるのか。もしや権三はそのことを知るまいな。

鬼火二 心配いらぬわ。知っていても、どうにもなるものか。ほれ、見てみる、あの葉っぱの山を。あの中からたった一枚をどうやって見つけるというのだ。

鬼火三 そうか、命の葉は一枚きりか。

鬼火二 命の葉といえども、枝から離れて大

分になる。さすがにもう萎れているだろう。

鬼火四 その命の葉は、他の葉と区別がつくのか。何か特別な印でもあるのか。

鬼火二 ほとんど見分けがつかぬらしいが、葉の裏にかすかに赤くて丸い染みがついているそうだ。

鬼火四 赤くて、丸い？

鬼火二 わからんか、赤くて丸いといえば、お天道さまだ。

鬼火一 なるほど、お天道さまの印か。

鬼火三 そんな頼りない目印では、到底見つかるまい。

鬼火一 砂の中から胡麻を拾うようなもの。

鬼火二 その通り、まさにその通り。

地獄の季節がやってくる

朝昼晩と人が死ぬ

花が咲いても人が死ぬ

雨が降っても人が死ぬ

黒縄地獄 叫喚地獄

八大地獄が押し寄せる

泣けども叫べど責め立てる

ああ 悦楽だ 悦楽だ

鬼火、いなくなる。

舞台が段々、明るくなる。

権三 俺は……たいへんなことを……いや、夢だ。これは夢に違いない。

権三、顔を洗おうと、井戸で水を汲む。

権三（覗き込み）な、何だ、これは。水が腐っている。もう災いが始まっているのか。

村人五、通りかかる。権三、村人五をつかまえて、桶に残った水を見せる。

権三　おい、これを見ろ。

村人五　何だ：：水がどうした。

権三　どうしたって。気づかぬのか！

村人五　何のことだ。

権三　嗅いでみろ。鼻が悪いのか。

村人五　何の臭いもせぬわ。鼻がおかしいのはおまえの方だ。

村人五、行ってしまおう。権三、もう一度嗅ぐ。顔をしかめる。

権三　あいつにはこの臭いがわからない。恐ろしいことだ。腐った水を飲んで気がつかぬうちに病になつてしまふ。魔の先駆けが早速押し寄せてきたのだ。ああ、俺の癪癪が取り返しのつかぬことをしたらしい。

権三の独唱。『取り返しのつかぬことをした』

取り返しのつかぬことを

してしまったのか

とんでもないことを

してしまったのか

俺のせいかな俺の罪か

俺のせいだ俺の罪だ

悔いてもどうにもならないが

何か手立てはないものか

血も凍るようなあやまちを

救う手立てはないものか

取り返しのつかぬことを

してしまったのか

ゆるされないことを

してしまったのか

俺のせいかな俺の罪か

俺のせいだ 俺の罪だ
泣いてもどうにもならないが
何か手立てはないものか
震えのとまらぬ しくじりを
救う手立てはないものか

取り返しのつかぬことを
してしまった

俺のせいだ 俺の罪だ

俺のせいだ 俺の罪だ

俺の 俺の 俺のせいだ！

権三 どうする。どうすればいい。どうすれ
ば……確か、そうだ。命の葉といったな。
そいつを探して。ああ。この、何というた
くさんの……でもやらねばならぬ。ほかに
大樫を元に戻す手がないのなら。

第四場 命の葉

権三、葉っぱの山にとりついて一枚一枚
葉の裏表を確かめている。

村人二 あいつは何をしてるのだ。

村人三 樫の葉っぱを数えているのだ。

村人二 葉っぱを数える？

村人三 俺がこの間、肥やしにするから少し
分けてくれといったら、ただじやいやだと
ぬかしやがった。

村人二 じゃあ、葉っぱを一枚いくらで売
つものりなのか？

村人三 権三は頭が変になったのさ。大樫の
あたりだ。それであの葉っぱが銭に見える
のだろう。

村人二 やあ権三さ、せいがでるな。まあ、

これだけたくさんのお宝だ。数えるのにはさぞかし骨が折れるだろうよ。

権三 おまえたちも手伝ってくれ！ 命の葉を見つければならんだ。すぐに櫟の根が腐ってしまう。そうなったら村は、村はえらいことになる！

村人三 な、何を言ってるんだ、いったい。

村人二 村がどうなるというのだ。

権三 ありとあらゆる災厄に襲われるのだ。三百年分の。いや、もう始まっている。井戸の水は腐ってきた。

村人三 何だと、水が腐ってるだと。馬鹿を言うな。

村人二 寝呆けてるのか？

権三 櫟は村の魔除けだったのだ。俺はそれを知らずに切ってしまった。

村人三 何だか知らぬが、宗旨替えが速いな。あれだけ厄介者にしていた櫟がやはり魔除けだと。

権三 村の皆を集めてくれ。俺と一緒に、命の葉を探してくれ！

権三、村人二にとりすがる。

村人二 よせつ、気色の悪い。

村人三 権三さ、わしらはおまえの冗談につきあっている暇はねえ。

村人二、三、立ち去る

村人二（村人三に）ありゃ、本当に気がふれているぞ。

子供たち、権三の様子を見ている。

権三、命の葉を探し続けている。子供たち、近付く。

権三 これでもない、これも違う、これも、これも……。

子供一 権三さ。

権三、気づかない。

子供一 権三さ、当り籤は見つかったかね？

子供たち、どつと笑う。

権三 おまえたち、そこで見てないで、助けられないか。俺、一人ではどうにもならぬ。どうか、一緒に探してくれ。

子供二 何を探すんだ。

権三 命の葉だ。大樗を生き返らせることのできる、たった一枚の葉だ。

子供一 生き返らせるだって！ そんなことが出来るものか。そもそも、樗を切ったのは誰だ。

子供たち、口々に「そうだ、そうだ」と叫ぶ。子供たちの唄。『樗長者』

権三 さ 葉っぱにご執心
頭にのせて とんぼをきれば

たちまち 小判に化けるでござる

葉っぱのお山は全部で七つ

樗長者の蔵七つ

権三 さ 葉っぱにご信心

寄せて集めて 御護摩をたけば

たちまち 靈驗あらたかでござる

葉っぱのお山は全部で七つ

樗行者の法螺七つ

権三、また一人で命の葉を探しはじめる。
必死の形相。

子供たち、いつもと違う権三の様子に戸

惑いはじめる。集まって相談。

子供一 権三さ、その命の葉とやらで、ほんとに櫛は生き返るのか？

権三 生き返る。きっと生き返る。だから頼む、この通り（土下座）。

子供たち、もう一度相談。

子供一 権三さ、おらたちも一緒に探そう。それで、命の葉というのはどんなものだ。

権三 そうか、探してくれるか。すまない。

ほんとにすまない。命の葉は、裏に赤いお天道様の印がある。

子供一 うん、わかった。（ほかの子供らに向かつて）みんな、わかったな。決して見逃すなよ。よし、かかれっ！

子供ら一斉に葉っぱの山にとりつく。

段々消えていく葉っぱの山。

権三、最後の葉っぱの山を前に。

権三 ここにある。きつとある。

突風。舞い上がる木の葉。悲鳴。

子供三 みんな飛んでしまった。

子供四 せっかく選り分けたのも台無し。

子供二 くたびれ損だ。

子供五 もう一度やり直しなんていやだよ。

権三 もうだめだ、おしまいだ。

権三、その場に崩れ落ちる。

子供たちも呆然と立ち尽くしている。

子供一 行こう。

子供たち、退場。

権三、俯せの大の字になつたまま。
間。

権三（つぶやく）ああ、蟻の行列だ。大勢で葉っぱを引いて……まるで祭りの山車のようだ。ひとおつ、ふたあつ、みいつ、よおつ、いつつ、むつつ……まだまだ続くぞ。蟻の氏子が山車を引く。櫂の葉っぱの山車を引く……おや、こちらの山車は紋付かい。赤いまんまる、日の丸つけて……赤い……まんまる……あ、赤い……あか、あか、あか、あつ、あつ、かつ、かかかかつ！

権三、跳ね起きる。蟻の運んでいた葉っぱをつかむ。

権三 あた、あた、あつた、あつた。これだ、これが命の葉だ。ああ、ありがたい。ありがたい。ありがたい。

命の葉を持って櫂の切株に近づく。

権三 こいつを切株にのせればいい……。

権三、切株にそつと葉っぱをのせる。
間。

権三 何も起こらぬ。

低く、うなるような音。
段々大きくなる。権三、切株の上の命の葉に手をのばす。思わずよろけて手をつくと、手は切り株の中に。権三が驚いて手を抜くと、濡れている。

権三 み、水か……水なのか。

切株は盥のように水に満たされている。

権三 一つのまに、こんな……。

命の葉を置いた辺りが、光る。

権三、それに吸い込まれるようにして、切り株の中に落ちる。そこは深い池であるかのように足が立たない。

権三 おっ、溺れる！ た、助けて……。

必死にあがくが、体はどんどん沈んでいき、ついに飲み込まれる。

第五場 月影の里

全身びしょぬれの権三、倒れている。傍らに若者、キイチ。権三、気づく。

キイチ やれやれ、やつと気がついたか。

権三 おまえは、誰だ？

キイチ おまえは誰だとはご挨拶だな。そういうおまえこそ誰なんだ。

権三 俺、俺は、権三だ。

キイチ 権三？ どの権三だ。

権三 この村で権三といえば俺だけ……ここは、どこだ？

キイチ 月影の里。

権三 ツキカゲ……ここは朝日村ではないのか。どおりで見慣れぬ顔だ。

キイチ 見慣れぬのはおまえの方だ。それにどうして池なんぞにいたのだ。

権三 池？

キイチ あきれた奴だな、俺がおまえを釣り

あげたのではないか。

権三 俺が……釣られた？

キイチ そうさ、それ、おまえのあごに傷があるだろう。池の主でも釣り上げたかと思つたら、おまえだった。

権三 (あごに手をやりながら) 俺は……切株に落ちて溺れて……。

キイチ 切株にだと！

里長、二人の里人とともに登場。

里長 ほお、この方か。池で溺れていたというのは。

キイチ はい、里長様。た少しおかしなことを申します。

権三 池に溺れたのではない。切株に落ちたのだ。そこに水が張っていて、井戸のように深くて……。

キイチ このように(笑)。

権三 (キイチに) 本当だ！

里長 まあまあ。つまり、こういうことか。

おまえさんの村の櫓の切株とこの月影の里の溜池がつながっていた。

権三 そんなことが。

里長 不思議なことだが、現におまえさんがここにいるのだから、そう信じるしかあるまい。まあ、しばらくわしのところでゆつくりしていけばいい。おい、キイチ、濡れた着物の替えを出してあげなさい。

舞台、一旦暗くなる。明るくなると、権三の着物が新しくなっている。

権三 この里は、何か妙だ……どいつもこいつも麻の頭巾をつけておる。男も女も、年寄も子供も、赤ん坊まで。それを絶対にはずさない……こちらの慣わしなんだろうが、

見ているだけで頭が痒くなる……それと、この里には広い畑があるのに何も植わっていない。それと……ああ、そんなことより、俺の村は、朝日村はどうなっただろう。もう、俺にはどうしようもないのだが。

キイチ 権三さ、どうした。

権三 いや、何でもない。

キイチ 疲れた顔をしている。

権三 あまり眠れないのだ。夢のような、幻のようなものをよく見る。

キイチ ほお、どんな幻だ。

権三 空に月が二つ出ているのだ。

キイチ 月が二つか、そりゃいい、賑やかでいいではないか。

権三 それと、キイチさ。俺は昨晚、このお屋敷で見たことが気になっている。

キイチ 里長様のお屋敷で何を見た。

権三 小便をすませて部屋へ帰ろうとしたら台所の明かりが見える。こんな真夜中に何をしているのだろうと思って、そつとのぞいて見た。

キイチ ふむ。

権三 そうしたら、ここの使用人たちが集まって何か食ってるではないか。何を食ってるかと思ったら……萎びた大根の尻尾のようなものだった。その情けないやつをみんなで少しづつ分け合っていた。これはどういうことだ。余所者の俺には三度三度飯をたらふく食わせてくれるのに……そこで気づいたが、俺はこの里に来てもう半月にもなるが、ただの一度もこの人間が飯を食っているところを見たことがない。ここには食うものがないのか。俺は余所者だから特別扱いしてくれるのか。それだったら申しわけないことだ。

キイチ そうか、見たのか……権三さ、俺たちはおまえを特別扱いしているわけではな

い。おまえが見たのはな、萎びた大根ではない。人参というものだ。

権三 人参？

キイチ 俺たちは米や麦を食わぬ。あの人参が俺たちの唯一の食い物なのだ。ところが、近頃さっぱり獲れなくなった。だから、萎びたやつぐらいしか口に入らんのだ。

権三 ではあのだだっ広い畑は、人参の。

キイチ そうだ。ひどいもんだ。

権三 なぜ獲れないのだ。水がないのか、お天道さまか？

キイチ 人参には水もお天道さまもいらぬ。

権三 では何が？

キイチ 音だ。太鼓の音。

権三 太鼓の音だと。

キイチ そうだ、あの人参はな、太鼓の音がなくては育たぬ。太鼓の音を聞かせてやると、それこそどんどん育つのだ。

権三 何を言うかと思えば。太鼓とは畏れ入った。太鼓で育つなら容易いではないか。

キイチ 冗談だと思っているな。

権三 冗談ではないのか。

キイチ 信じられぬか。

権三 まあいい。ならばドンドコドンとやればいいではないか。それともこの里には、太鼓がないのか。

里長 太鼓がないですと！ ありますぞ、太鼓は。権三殿、田舎だからと馬鹿にしたものではない。

里長、いつのまにか権三の後に。

権三 お、俺は、そんなつもりで……。

里長 キイチよ、権三殿に見せてやれ。

キイチ、太鼓を取りに行く。

権三 俺はその。
里長 まあ、見てくだされ。

キイチ、里人たちと巨大な太鼓を引いてくる。

権三 な、何と。何と大きな！

里長 いかかな？

権三 こんな大きな、こんな見事な太鼓は見
たことがない。胴は六尺、いやもつとある
か。しかし、よくこんな太いものをつくる
木があつたものだ。

里長 樗です。

権三 け、樗と。

里長 だが、これが云とも寸ともいわぬ役立
たず。

キイチ、バチでたたくが、ドスドスと、
砂をたたくような鈍い音がするだけであ
る。

権三 何故、鳴らんですか？

里長 この太鼓が鳴らんのは、そこに（胴を
指し）呪い札が貼つてあるからだ。

権三 呪い札？

里長 ほれ、そこに。あまりに小さくてわか
らんかな。

権三 こ、これは……これは、い、いの、命
の葉だ。どうして、こんなところに。

里長 これが貼りついている限り、太鼓は鳴
らんのじゃ。しかし、わしらではこれを剥
がすことができぬ……だが、おまえさんな
らできるかも知れぬな。

権三 お、俺にできるものか。おまえさん方
に無理なものが、俺にできるわけがない。

里長 やってみなされ。

権三 ……。

里長 さあ、やるのじゃ。

権三、脅されているかのように太鼓に近づく。おずおずと、命の葉に手を伸ばす。

権三 間違いない。あの、命の葉だ。

手が触れたとたん、葉が太鼓の胴から剥がれ、権三の手のひらに収まる。

と、一斉に「おお」というどよめき。

続いて、「くっくくく」という気味の悪い笑い声。

里長 権三さ、朝日村の権三さよ。何と礼を言ったらいいか。

権三 俺は……。

里長 これで太鼓は鳴る。思う存分鳴らすことが出来るぞ。

権三（里長に） 前からひっかかっていたことがある。俺がここへ来たときのことだ。俺が切株に落ちたといったら、おまえさんはこう言った、櫓の切株とこの里の溜池がつながっているのではないかと……俺は切株とは言ったが、櫓とは一言もいわなかった。なのにおまえさんは、それが櫓と知っていた。

里長（答えず） さあ、皆の衆、太鼓を畑に運ぶのだ！

第六場 人参畑

畑の中央に据えられる太鼓。

大勢の里人たちが集まっている。

屈強な若者が二人あらわれる。手に太いバチを持っている。

権三 あつ、あいつら、見覚えがあるぞ。そうだ、太鼓の胴にするのだと櫓を買いにきたやつらじゃないか……ではやっぱりこれはあの大櫓……だが、太鼓がそんなに簡単にできるわけがない。

里長 さあ、始めよ！

若者、太鼓を打ち始める。

途端に、怪しい雰囲気。

太鼓が打たれるたびに、地中から何やら伸びてくる。それは人の手の形をした人参の葉。埋められた死体から突き出した手に見える。それが何本も畑に生える。

里長 もういいだろう。さあ、皆の衆、収穫じゃ、収穫じゃ！

里長の声を合図に、一斉に人参を掘り出す里人たち。年寄りも女、子供も奪い合う。

キイチ ほれ、これが人参だ。

キイチが掘り出した人参を権三の前に突き出す。それは人間の下半身そっくりの気味の悪い形。

キイチ 食ってみるか？

顔をそむける権三。かぶりつくキイチ。真っ赤な汁が飛び散り、口の回りを汚す。里人たちの口も赤い。汁をだらだらと垂らしながら、むさぼり食う。

権三 お、おまえらは、おまえらは何者だ！人の姿をしているが人ではあるまい！

キイチ やっと気づいたか。俺たちは魔だ、俺たちは魔物だ。

権三 魔だと、魔物だと！

キイチ そうよ、ここは魔界、魔物の里だ。

権三 ではこの太鼓は……。

キイチ 察しの通り、おまえの家のあの太鼓でつくった魔太鼓だ。永年、我らが憎い仇だった櫓のはらわたを割り出し、病気の獣の皮でくるみ、首切役人の刀を溶かした釘で留めた特別誂えだ。これをたたけば人參が育つ。おまえら人間の呻きや叫び声をたっぷり吸った人參がな……ところが、おまえが見つけてしまった命の葉が、どこからともなく飛んできて太鼓に貼りついた。そうしたらたちまち役立たずだ。

権三 お、俺は、わざわざ護符を剥がしてしまったのか。

里長 おまえらには護符かもしれんが、わたしには恨みの札、呪いの札だ。わしら魔には触れることができぬ命の葉も、人間のおまえになら剥がせるのでは、そう考えたら案の定。

権三 すべて承知のことだったのか。

里長 もちろんだ。わしらはずっと待っていた。永いこと、おまえのような大たわけが現われるのをな。

里長、頭巾を脱ぐ。短い角がある。里人
たちも頭巾を脱ぐとやはり角がある。

キイチ 権三。魔という字を知っているか。
あの由来はな、麻の頭巾をかぶった鬼のこ
とさ。

里人、いや魔物たちの哄笑。
魔物たちの唄。『人が滅べば魔が栄え
る』

食い尽くせ 食い尽くせ 命の根
人が枯れれば 魔が繁る
飲み尽くせ 飲み尽くせ 命の汁
人が滅べば 魔が栄える
地震も日照りも 大水も
夏の寒さに 病気に戦（いくさ）
災いの素 たっぷり吸って
育て人参 魔の畑に
殖えよ人参 魔の里に

権三 畜生、畜生。このままでおくものか！

権三、懷から先程剥がした命の葉を取り出すと、太鼓の胴に貼りつけようとする。

キイチ 無駄だ、無駄だ。一度剥がした護符に、もう効き目などないわ。

権三、太鼓を殴り付ける。と、手に持っていた命の葉から炎があがる。三寸ばかりの命の葉が松明に変わる。

里長 とりあげろ！ そいつをとりあげろ！
権三 これで、どうだ！

権三、命の葉の松明を太鼓に押しつける。皮に穴があき、燃えだす。

里長 消せ、消せーっ！ 早く消すのじゃ！

里人たち、権三に迫る。突然、太鼓の穴から火のついた櫓の葉が吹き出す。燃える櫓の葉は里人（魔）に降りかかる。里人たちは蜂に刺されたかのように逃げ回り、地面をのたうちまわる。その隙に権三、逃げようとする。

キイチ 待て、権三、どこへ行く。逃がすな
逃がすなーっ！

権三、暗闇を逃げる。空中から声。

空中からの声 逃がさんぞ。逃がさんぞ。

空を見上げると月が二つある。双子の月
は空にかかった巨大な目玉で、権三を空
から見張っている。

空中からの声 権三が逃げる。権三が逃げる
ぞ。山の方に向かっていているぞ。

里人（魔）たちの追う声。「いるぞ、い
るぞ」「こつちだ」「いや、あつちだ」
権三、穴に潜り込む。

キイチ 権三の臭いがここでとぎれている。
里長 ここらにいろはすだ。捜せ、捜すの
じゃ。

魔たちの唄。『権三をさがせ』

権三をさがせ つかまえろ
首っ玉とらえて つれてこい
ひきずりたおせ ふみつける
縛り上げたら しめあげろ
魔界の秘密を守るため
生きてかえしてなるものか

権三をさがせ つかまえろ
死んでもいいから つれてこい
どこへ逃げても 追いかける
魔界の掟を守るため
生きてかえしてなるものか

権三をさがせ つかまえろ
何がなんでも つかまえろ
権三をさがせ つかまえろ
何がなんでも つかまえろ！

第七場 大蛇の穴、鳥の河原

穴の中を這うように進む権三。

権三 はあ、もう追ってはこないのだろう。
さすがに……真っ暗だ。痛いな、ああ、膝
が痛む。必死で逃げていたから気づかなん
だが、ああ、痛い。きつとそこら中傷だら
けだ。それに、なんだ、このじめじめとし
て気持ちの悪いこと……随分と奥まで来て
しまったが、この先はどうなっているんだ。
行き止まりか、どこかに抜けるのか。そう
はいつでも戻るわけにもいかんし。

権三、何かにつまずく。

権三 な、何だ……ひ、ひいっ！ 何だ、こ
れ、ぬるぬるして、う、動いたっ！

闇の向こうからかすれた声。

闇の声 誰だ、俺様の尻尾を踏んづけたのは。

その声は、土竜どんではなさそうだし。
権三 おまえこそ、何……わわ、わわわ。

闇の声の主の眼が赤く光る。権三、腰を
抜かす。

闇の声 おやおや珍しいことがあるものだ。

おまえは人間ではないか、人間がこんなところでは何をしてるのだ。

闇の声の主、浮かび上がる。大蛇。

大蛇 どうせろくな素性の者ではあるまい。大方宝探しか、さもなくば、外で悪いことでもして逃げ込んできたのだろう。やい、悪党！　ここがおまえのとどのつまりとあきらめて、俺様の腹の中に入れ！　ずっと暗い中を進んできたのだろうが。この先も少々狭くなるが、たいして変わらんぞ。

大蛇が唄う。『提灯下げて』

提灯さげてお出迎え

暗い夜道は危なかる

親の情けのありがたさ

食べたいほどに愛しい子

大蛇、権三に巻きつく。

大蛇　ぱくりといく前に、この世に言い残すことがあれば聞いてやろう。

権三、震えている。

大蛇　愛想のないやつだ。せめて名前くらい乗ったらどうだ。俺もどこの何様を食ったかわからんと、あたったときに困るからな。おいっ。

権三　ご、ござう。

大蛇　ござうだと？　それでどこのござう様だ。

権三　あ、あさ、朝日村の権三だ。

大蛇　何、朝日村の権三といえば、大樺の、大樺の権三さんか。これは兄弟、とんだ失

礼をしてしまった。人が悪いな、それを早く仰ればいいのに。

大蛇、権三の体をはなす。

権三 俺とおまえが兄弟だと。

大蛇 おまえさんがあの高名な大擲の権三さんならば、どうか兄者と呼ばせてほしい。

権三 ……。

大蛇 お噂はかねがね。大食らいの俺でさえ、一度に三十、四十がいいところ。それを百と二十と八個とは誠に畏れ入る。おまえさんは、我ら卵食いの大将だ。権三さん、ぜひこれを縁にご昵懇を願いたい。

権三 何のことかわからんが、食われずにすんだようだ。

大蛇 それで兄者は、どちらへいらつしやるつもりで。

権三 どちらと言われても……とにかくこの穴から出たいのだ。この先、どう行ったらいいか教えてくれまいか。

大蛇 この先は、あまりおすすめできないんですが……それよりも戻られた方が。

権三 戻るわけにはいかん。

大蛇 そうですか。兄者がそう仰るのなら、ご案内申し上げましょう。

大蛇は権三を先導する。

提灯下げてどこへいく

暗い夜道をどこへいく

わたしや 実家（さと）までお見舞いに行かねばならぬ今日中に

提灯下げてどこまでも

暗い夜道をどこまでも

鼻緒が切れても裸足でも

いまさら戻れぬ帰られぬ

権三 まだ遠いのかい？

大蛇 もうちよつとですよ。

提灯消えたらどうしよう

一本道ならよいけれど

右と左の分かれ道

どちらが地獄か極楽か

大蛇 さあ兄者、出口はここからすぐです。

ただ、くれぐれも気をつけてくださいよ。

変なやつらがうろうろしてますから。まあ、
兄者なら平気でしょうが。

権三 ところで、俺が卵を百二十八食ったと
いう話だが。

大蛇 大櫓の鳥の巢の卵を全部、百と二十八
個。一度にたいらげたと。

権三 と、鳥の巢の卵……それで卵食いの大
将か。

大蛇 もっと多かったですかい。

権三 いや、その。

大蛇 さあ、出口です。ほれ、明かりが見え
るでしょう。百歩も歩かぬうちに外に出ら
れますよ。じゃあ、兄者、俺はここで失礼
させてもらいます。

権三 ああ、遠くまですまなんだ。

大蛇 いいえ、くれぐれもお気をつけて。

権三が穴を出ると、そこは河原。

権三 まぶしい……ここは、どこだ？

河原には女たちがいる。全員権三に背を
向けている。衣裳が奇異。斑の模様、や
けにきらきら光るまつ黒のがあれば、前
身ごろが白くて後が青とか、裾だけ黄色

であつたり、衾だけ赤いものもある。
しやがんで、石を積んでいる。

塞の河原の石をとり

これにて回向の塔を積む

ひとつ積んではせがれのために

ふたつ積んではむすめのために

かなしや やれかなし

権三 どういう連中だ。百姓の女房や娘に
てはずいぶん派手なりだ。まるで旅芸人
のよう。(女一に) もし、ちよつとお尋ね
したいのだが、ここは何という村かね？

女一、答えず。石を積む手を休めない。

権三 もし……聞こえないのか。

女一 子供の供養をしております。

権三 ああ、あの、ここは？

女一 ここにいる女たちは皆、子供をなくし
たのです。

権三 それは、お気の毒に。

女一 殺されたのです。

権三、その場を立ち去ろうとする。女一、
権三の着物をつかまえる。

権三 な、何をする。

女一 おまえさんも、石を積んでくだされ。

権三、女の迫力に押され、石を積む。し
かし、回りの女たちのようにうまく積め
ない。何度やつてもすぐ崩れてしまう。

権三 くそつ、腹の立つ。

女一 権三さ、石は積みんかね？

権三 い、今なんといった！ おまえ、俺の
名を知っているのか？

女一　もちろんさ、おまえは朝日村の権三、大櫓の権三だ。さあ、早く石を積みめ！

権三　俺には積みぬ。

女一　積みぬだと！　いや、積みめ！　きっちり百と二十八個、積みめ！

権三　積めるものか！　だいたいこの河原の石はどれも丸くて、これじゃまるで卵を：今、百二十八と。

女一　卵がどうした、権三。いや卵食いの大将、極悪人、大泥棒！　まだわからんか、その石をよく見てみる！

権三　こ、これは：：鳥の。

女一　おまえが大櫓を切り倒したとき、わたしらの大切な卵が百と二十八、つぶれた。

権三　では：：おまえらは。

女一　大櫓の住人だったものさ。

女たち、権三のまわりを囲む。

女一　権三、積みめ。わたしらの子供の命の数だけ石を積みめ！

女たち　権三、石を積みめ！

権三　積みぬ、積みぬ、積めるわけがない。

女たち　権三、積みめ！　積みめ！　積みめ！

女たちの唄。『かわいいそうな子供たち』
権三をいたぶりながら。

かわいいそうな子供たち
一度も空を飛べなんだ
かわいいそうな子供たち
空はこんなに広いのに

かわいいそうな子供たち
さえずることさえできなんだ
かわいいそうな子供たち
おいしい餌もくちにせず

かわいそうな子供たち
たまごのままで死んじやった
かわいそうな子供たち
落ちてつぶれて死んじやった

権三 許してくれ、許して。

女一 許さぬ。許すものか。おまえもかわい
い卵たちと同じ目にあうがよい！

女たち、鳥の姿になる。権三をつかま
え
ると空中に持ち上げる。

権三 よせ、よせ！ やめてくれ！

暴れる権三。しかし、段々空の高見に
上っていく。

女一 子供らの恨み、思い知れ！
女たち 思い知れ！

権三、落下。舞台に閃光。轟音。

第八場 権三変化

背景、暗い。わずかに権三の顔がぼんや
りと浮かぶ。

権三 俺は死んだのか。そうだろうな、あんなに高いところから墜ちたのだから、生きているわけがない：：暗い、何も聞こえぬ：：これが、死んだということか。やれやれ、大蛇の穴にいるのと変わらん：：そのうち、起きているのか、眠っているのかわからなくなるのだろう。それもどうでも

よくなり、何も考えたり煩ったりしなくなるのだろう。

ピーンと弾くような音。

権三 おう。におうぞ、何の、においだろう。ああ、覚えがあるのに思い出せない。何だったか……。

ざわざわと、風の音。

権三 冷たい。いや、熱いのか？ いや冷たい、これは冷たいのだ。何か、ふれてくるぞ。何かがぶつかる……冷たい、冷たいもの……このにおい。雨……そうだ、これは雨だ！ このにおいは雨のにおい、雨のしずくが……俺は、雨に濡れているのか。

雨音。

権三 待てよ、俺は空から落とされて、つぶれて死んだはずでは……それがどうして。

周囲の景色が、霧が晴れるように徐々にはつきりしてくる。

舞台、中央に大櫓。そして櫓の木と一体化した権三。しかし、権三は己れの「変化」に気づいていない。

権三 何だ、ここは……ここは見たことが、ここは、俺の家の近く……近くどこでないぞ……何だ……おい、ははは幻だ。こりや幻だ……首が動かぬが……上の方にかぶさっているのは……櫓？ 櫓か！

おかしい、おかしい、おかしいぞ。あそこに見えるのは確かに俺の住んでいた家だ。だが、新しくなっている。ずっとずっと新

しい。どういふことだ、切ってしまった櫟があつて、家が新しくなつて。

小さな男の子がいる。「おーい、嘉助」と呼ぶ声。それに応じて走り去る。

権三 嘉助、今、嘉助といったな。嘉助といへば……いやそんな馬鹿な。だが、あの子供の額にもこぶがあつたぞ。嘉助爺さんの額にも梅干しくらいのこぶがあつて、貧乏暮らしのくせに、金の貯まる金こぶだと言いやがつた。俺はよくそのこぶにさわらせて……まさか、あれが嘉助爺さん？ いや、爺さんの子供の頃の姿か……ということとは孫の俺が……わからん、わからん！ いったい何が起こつたのだ。

男の子、戻ってくる。立ち止まり、櫟の方、すなわち権三の方を向く。

権三（男の子に）おいっ、おいっ。聞こえないのか。くそっ、なぜ身動きがとれぬ。まるで縛られているよう……。

権三、腕を動かそうとする。その拍子に櫟の枝がガサツと鳴る。

権三 な、何だ。

権三、繰り返す。

権三 こ、これは……櫟の中だ。いや、そうでない……俺が……お、俺が櫟なのだ。け、櫟になつたのか……こ、これではまるで木賊虫（とくさむし）、寺の地獄絵で見た、餓鬼の木賊虫ではないか。日陰になる木を切ったり、寺の林を切った者が報いを受け

樹の中に閉じこめられるという……ああ、
何てことだ。血の池や針の山の方がましだ。
こんなところに閉じこめられるくらいなら。

『繰り返し』の唄。権三の独唱から合唱。

朝が来て 夜が来て

また朝が来る

日がのぼり 日は沈み

またのぼり

月が欠け 月が満ち

また月は欠け

繰り返し 繰り返し

繰り返しながら

変わることない時の歩み

権三

一日がすぎ、二日がすぎ、三日がすぎた。腹が減ることも、渴くこともない。そして眠ることも。ただ、俺はここにいて見ているだけだった：はじめのうちは一日がひどく長く感じられたが、やがてそれにも慣れてしまった。一月がすぎ、二月がすぎ、三月がすぎた。はじめは一月がひどく長く感じられたが、やがてそれにも慣れてしまった。

春が来て 夏になり

秋が来て 冬になり

また春に

芽がふき 若葉萌え

紅葉（もみじ）して 枯れ落ち

また芽がふき

繰り返し 繰り返し

繰り返しながら

変わることのない季節の巡り

権三

春、若葉が出る頃は体中がむずがゆく

なった。古い皮がぼろぼろとはげおち、新しい木肌が顔を見せる。秋に産み付けられていた虫の卵がかえり、青いのや黒いのが、ごそごと這いまわる。巣をつくりにつがいの鳥が集まり、まもなくくちばしの黄色い雛どもがぴいぴいと騒ぎだす：：夏になり、葉が厚く繁ると髪が伸びすぎたようであつとうしく感じた。虫や鳥や小さな獣が忙しく動き回る。ここぞとばかりに鳴く蟬のやかましさといったら：：秋になるとたびたび嵐が襲った。殴りつけるような雨。大風に腕はねじられ、背骨が折れそうになる。嵐の季節が終わると、一雨ごとに寒くなり、緑だった葉は黄色に、それもまもなく茶色に枯れ、そうなるともうかすかな風の一吹きで枝を離れ、地面に降り積もっていく：：冬、葉が落ちてしまうと、何だか骨だけになったようで、ひどく頼りない。夜には冷え冷えとした月の光がさしこむ。霜がおり、木枯らしがふきすさぶようになり、やがて雪の季節だ。初めはさらさらと粉おしろいをぬりつけたようだったのが、じつとりしめったぼたん雪が積もるようになり、腰の辺りまで埋め、そうなると根元までしんと冷える。雪の重みに耐えられぬ細い枝がぼきぼきと折れて：：季節は走馬灯のようにぐるぐるぐるぐると。

櫓の回りで遊ぶ子供たち。

子供一 おらが殿様だ。

子供二 ずるいぞ、この間もやったじゃないか。

子供一 文句があるか。俺様がこの櫓城の主、疣の守蝦蟇の介だ。

子供三 蝦蟇なのかよ。

子供一 そうだ。おそれいったか。

子供二　ちえっ、じゃあ、おらは敵方の大将だ。やあやあ、我こそは朝日村の住人、うわばみ太郎だ。城を出て尋常に勝負しろ。

子供一　うわばみだと。

子供二　そうさ、蝦蟇なんぞ一口で飲み込んでやる。

子供一　じゃあ、おらは名前を変える。なめくじ佐衛門だ。

子供二　何だよ、ずるいぞ。よーし、塩を投げつけてやれ。

子供二と三、子供一に葉をなげつける。

子供一　わっ、卑怯者め。許さんぞ。

子供一は子供二と三を相手に木の枝でチヤンバラごっこ。少し押され気味。味方の子供四（女の子）と子供五（一番小さな）のところへいく。

子供一　もはや、これまで。おまえたちは城を抜け出せ。

子供四（芝居っ気たっぷりに）殿はどうなされます。

子供一　わしは城と一緒に果てよう。おまえたちは、いつかお家を再興してくれ。

子供四　殿、わらわも一緒に。

子供一　ならぬ、ならぬ。

子供四、五、櫓城を抜け出す。

子供二　覚悟、覚悟。

子供一　もはやこれまで。（切腹の真似）

子供三（切りつけて）なめくじ佐衛門、討ち取ったり！

子供たち、去る。

人は生まれ　人は老い
そして人は死ぬ
可愛い赤ん坊も
やがて娘に　母親に
さずかりし命誰かに伝え
そして人は死ぬ
繰り返し　繰り返し
繰り返しながら
変わることはない人の運命（さだめ）

櫓に憩う村人、子供たち。
重なるように嫁入りの行列、虫追いの列、
秋祭りの列が舞台を横切っていく。
舞台、静かになる。
一人の旅の僧がじっと櫓を見つめている。
と、何かに気づき驚いたようす。手をあ
わせ読経、深々と頭を下げる。

権三（つぶやく）　見たぞ。俺を見た。櫓で
はない。俺を見たのだ。俺がここにいるの
がわかったのだ……。

赤ん坊の泣き声。

権三　夏の暑い盛りに俺は生まれた。上の二
人は小さいうちに死んで、三番目に生まれ
たのが俺だった。

子供一、二、三、四、櫓に上っている。
上れないでいるのは子供五と子供六（権
三の子供時代）。子供らが、上れない二
人をからかっている。子供五、必死にと
りつき、とうとう上る。

子供五　やった、やったよ。
子供二　よし、これで上れないのは権三だ

けだ。やーい、やーい。

子供たち子供六（権三）をからかう。子供五は、樹上から子供六めがけて放尿。

子供六（権三）よせ、よせよ、やめろ！

泣き出す子供六。子供たち、子供六を残して退場。

権三（つぶやく）ちえっ、我ながら不器用なものだ。

子供六、一人で櫓に上る練習を始める。

権三 ああ、どうした……もう少しではないか……よし、もう少しだ。

子供六、何とか上りきる。

権三 ああ、思い出した。思い出したぞ。あのときはうれしかった。だが、そのあとがいけない

子供六、放尿をしようとして、自分の着物を濡らす。泣き出す。

権三 やっと上れるようになって、それから毎日、一人で遠くを眺めてた。

背景、夕空から星空へ。
舞台明るくなる、鈴の音。葬列が横切っていく。子供六、消えている。

権三 親父が亡くなって、そのあとを追うようにおふくろも逝って、俺は一人になった。

若者（権三に似ている）と村娘。

村娘 この間の話だが。

若者 やっぱり俺じゃ、駄目か。しかたねえな、俺は甲斐性なしの貧乏百姓なものな。

村娘 大樗の権三さは、いい人だけど。

若者 大樗の権三さはよせ。そんな呼ばれ方は好かん。

村娘 おまえの親父さまだって、大樗の作次さと呼ばれていたではないか。

若者 親父は、親父だ。

村娘 その親父さまが亡くなったのだから、おまえが大樗の権三だ。村のみんなもそう言ってる。

若者 すると何か、俺は大樗を襲名したとも言うのか。

村娘、笑う。儼然としている若者。

権三 そうだ、あのときからだ。俺が大樗をうとましく思いたしたのは……些細なことだった。取るに足らぬことだった。だが、あれ以来、樗が嫌いになった。誰かが憎しみの種を播いて、それがどんどん育って……そうか、それが魔物どもの企みだったか……長い時をかけて俺に樗を憎ませ、いつかその手で切らせてしまう……それにしても、親父も爺さんも曾爺さんもひっかからなかったのに、どうして俺だけまんまと罠にかかったのだ。ああ。きっと俺には魔につけいれられる弱さがあったのだ。ああ、このままでは筋書き通りになってしまう。魔たちの思うつぼだ。大樗を切ってはならん。誰か、誰か、聞こえぬか。切るな、樗を切ってはならん！（絶叫）

舞台には村人たち、子供たち。

木挽きが歌いながら巨大な鋸を引く。

木挽きの暮らしは山暮らし

女房残して相方と

峰を渡りの 啄木鳥さ

やーせい やーせい 声あわせ

やーせい やーせい 声あわせ

切って倒して 何千本

お侍なら今頃は 十万石のお大名

村人二 まるで腹切りの途中を見せられてい
るようだ。

村人三 ああ、いやな気分だ。

村人四 ぎいぎいと泣いているよ。

村人五 ああ、泣いている。

木挽きの暮らしは山暮らし

女房こいしや相方と

鋸（のこ）をはさんで抜き差しさ

やーせい やーせい 声あげて

やーせい やーせい 声あげて

仕留めて刻んで 何千本

鯨刺しなら今頃は 浜一番のお大尽

権三 切るな、樫を切るな……ああ、目がか

すんできた。もう終わりだ。これで一卷の

終わり……ああ、すまなかった。みんな、

すまなかった。樫を守ってきたご先祖たち、

樫を愛してくれた村の衆、子供たち、樫を

頼りにしていた生きものたち……。

木挽きの暮らし山暮らし

女房忘れて相方と

飲んで唄うがなぐさめさ

やーせい やーせい 声枯れて

やーせい やーせい 声枯れて

見立てて選んだ 何千本

お女郎買いなら今頃は 廓で噂の色男

権三 許してくれ、許して。

木挽き、鋸を抜き、斧を入れる。

木挽き一 おーい、倒れるぞ！

櫓、倒れる。轟音。土煙。

第九場 夢から覚め

一場と同じ、大櫓は元のまま。根元近くに権三が倒れている。心配そうにのぞき込んでいる子供たちと村人一と村人二。

村人一 おいつ、権三！

権三 うう、うう……。

村人一 おいつ、おいつ！

権三 ゆ、許して、許してくれ。

村人一 おいつ、権三、しっかりしないか。

権三 あっ、あ？

村人二 やつと気がついたか。

権三 ここは、どこだ？

村人二 ここはどこだと。（村人一に）いかな、こりゃ、頭にひびが入っているかも知れんぞ。

村人一 ここは、おまえの家の前だ。

権三 そう、らしいな。腹は……切れていないようだ。だが、頭がずきずきする。俺はいつたい、どうしたというんだ？

村人一 覚えておらんのか。おまえはな、櫓を見にきた旅人を追いかけて回し、足を滑らせ、根元に頭をぶつけたんだ。

権三（頭をおさえ）頭を……。

村人二 子供らがわしらを呼びにきたんであ
わてでかけつけたが、なかなか正氣に戻ら
んから。

権三 俺は何日氣を失っていたのだ。

村人二 何日だと。そんな大げさなものでな
い。なかなかといつても、一刻ほどだ。

権三 一刻……たったの。

村人一 どうした、いい夢でも見たのか？

権三 では、今までのはずべて……そ、そう
だ、樗は、樗はどうなった！

村人二 樗がどうしただと。おまえのうちの
大樗は、どうにもならぬわ。

権三 無事だった。ああ、無事だった。

権三、樗にとりすがって号泣。

村人一 何を言ってる。無事かどうか心配し
なければならぬのは、おまえの頭の方だ。
たとえおまえのがどんな石頭でも、この樗
がどうにかなるものか。

権三 いいのだ、無事ならそれでいい。あり
がたい、ありがたい。

村人二 へっ、どうにも人騒がせなやつだ。

村人一 もう大丈夫だ。さあ、帰ろう。

村人、子供たち帰ろうとする。子供の一
人（権三の子供時代を演じた子供六）が
しゃくりあげている権三の背中に何かつ
いてるのに気づき、それをとる。

子供一（子供六に）何やってるんだ。

子供六 権三の背中についてた。

子供二 何だ、樗の葉っぱじゃねえか。

子供六 うん、でも変な葉っぱだ。

子供三 ああ、赤い染みがついてる。

その声に反応する権三。

子供一丸くて赤い。こりや、まるで。
子供たち（声を揃え）お天道さまの印だ。

呆然と立ちつくす権三。

『なんて立派な大櫓』の唄が聞こえる。

何と立派な大櫓

見惚れてしまうその姿

雲にも届くその高さ

梢で休む風の神

空を覆いし大屋根で

雨粒一つ漏らさない

舞台脇から、権三をじっと見ているもの
がいる。それは、あの旅人だが、よくみ
ると一場の仏師に似ている。

何と立派な大櫓

心動かすその姿

世に名刹は数あれど

三百年の齢が築く

天を支える青き伽藍

住まう仏は数百羽

何と立派な大櫓

声も失うその姿

一度見たなら忘れぬ

一度見なければすまされぬ

朝日村にはすぎたる名所

かくも尊き大社

幕。